

人類愛善新聞

復刻版
全5巻



● A3判・上製・総約1300頁
● 大正14年の創刊号から、昭和10年に起きた日本国家による第二次大本弾圧により発行停止になる第三一九号までを全5巻に収録。

● 原本提供……宗教法人大本本部教学研鑽所資料室
● 解説……對馬 路人（関西学院大学教授）（第5巻所収）
● 推薦……井上 順孝（國學院大学教授）

島 蘭 進（東京大学大学院教授）
原 武史（明治学院大学教授）
ナンシー・ストーカー（テキサス大学准教授）

● 本体揃価格…175,000円＋税

● 刊行……第一回配本（第一巻〜第三巻）2012年10月刊

● 本体揃価格…105,000円

ISBN978-4-8350-7089-6

● 第二回配本（第四巻〜第五巻）2013年5月刊

● 本体揃価格…70,000円

ISBN978-4-8350-7093-3



出口王仁三郎は、「芸術は宗教の母なり」と唱え、自らも書、画、短歌、陶芸など芸術活動に取り組み、膨大な作品を創作。中でも耀盤と呼ばれる茶碗は、国内はもとよりヨーロッパ、アメリカなど海外を巡り、各方面より高い評価を得ている。

●関連図書のご案内●

● 毛利柴庵 ― 主筆（明治三年〜大正九年刊）
● 牟婁新報 《全三三巻・補巻一・別冊二》
● 解説…門奈直樹・武内善信・中瀬喜陽

● B4判・A4判/上製/総1,424頁

● 揃定価…本体934,000円＋税

● 01年5月〜06年1月配本完結（復刻版）

● 推薦…赤松徹真・高嶋雅明・鶴見和子・中瀬喜陽・堀切利高

明治三年、和歌山県田辺市で毛利柴庵によって創刊された本紙は、県内外から多くの革新的思想家たちが寄稿し、平民社落城後の初期社会主義の砦ともいえる存在となった。世界的な民俗学者・博物学者として知られる南方熊楠が健筆を揮って、柴庵とともに環境保全・自然保護、宗教の自由等の問題に取り組んだこともその大きな特色である。エコロジー運動のさきがけとしても貴重な資料。

● 荻野富士夫 ― 編・解説
● 特高警察関係資料集成

● 第1期 ― 全30巻・別冊1

● A4判・上製・総14,300頁

● 揃定価…本体価格775,000円＋税

● 91年6月〜95年3月配本完結（編集復刻版）

● 推薦…今井清一・奥平康弘・松尾尊兌・由井正臣・渡部 徹

● 第2期 ― 全8巻

● A4判・上製・総3,200頁

● 揃定価…本体価格200,000円＋税

● 04年6月〜12月配本完結（編集復刻版）

● 推薦…伊藤 晃・加藤哲郎・田中真人

特高警察に関する膨大な資料の中から、今日重要と思われるものを整理・復刻。一二のテーマに分け、これまでに殆ど知られていなかった米騒動、一九二〇年代の社会運動、大本教等新宗教取締関係等の資料群も収録。

第2期は第1期に収録できなかった資料、新たに発掘された資料を第1期のテーマ分類および資料番号を継承して編集。米国議会図書館所蔵のいわゆる米軍没収資料や旧中野警察学校所蔵資料も収録。

人類愛善新聞社 発行

人類愛善新聞

復刻版
全5巻

● 収録…1925年10月〜1936年2月
● A3判・上製・総約1300頁
● 大正14年の創刊号から、昭和10年に起きた日本国家による第二次大本弾圧により発行停止になる第三一九号までを全5巻に収録。

● 解説…對馬 路人（関西学院大学教授）（第5巻所収）
● 推薦…井上 順孝（國學院大学教授）
島 蘭 進（東京大学大学院教授）
原 武史（明治学院大学教授）
ナンシー・ストーカー（テキサス大学准教授）

● 本体揃価格…175,000円＋税

戦前期、日本国家がその勢力を恐れ、最大の宗教弾圧が断行された新宗教「大本」。
当時の社会思想、世界の宗教動向、満州等の移民社会が垣間見られる幻の機関紙を復刻!!



出口王仁三郎（1871〜1948）
大本教祖
人類愛善会初代総裁
大日本武道宣揚会総裁
昭和神聖会統管



人類愛善會趣意書

主 旨
本會は人類愛善の太極を掲げ、全人類の種族階級を
来し、永遠に争議と敵意とに充てた光明世界を實現する
ため、最善の力を盡さんことを期するものである。

聖 言
○ 人類は神の御子である。
○ 神は愛の御霊である。
○ 神は愛の御霊である。
○ 神は愛の御霊である。

歴史に藝術が
善を傳ふ龜山
時 代 觀
善者に勝るを
争者に勝るを
争者に勝るを
争者に勝るを

不二出版

● 表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシムリ03-3812-4464
振替001600294084

「人類愛善新聞」とは、大正一四（一九二五）年に発会した大本（大本教）の外郭団体である人類愛善会の機関紙であり、その読者は台湾、満蒙、南洋、南米にまで広がり、昭和九（一九三四）年には百万部の発行部数を超えるに至った。一般人をはじめ軍人、国会議員・華族等からも賛同者が急速に増えたことで、その影響力を危惧した政府は、昭和一〇（一九三五）年に宗教団体に対し初めて治安維持法を適用し、日本近代史上最

の弾圧事件については戦時中の法廷で大本に「無罪」判決が下りたものの、当時その結果を報じる記事は皆無に等しく、むしろ弾圧勃発時に新聞は大本を「淫祠邪教」と報じたことで、大本は戦後長く迫害と誤解にさらされた。弊社は、今まで見ることが難しかった「人類愛善新聞」を、宗教法人大本の協力により全号揃いで復刻する。

人類愛善新聞・大本関連年表

Table with 2 columns: Year (西暦) and Key Events. Includes dates from 1871 to 1952 and corresponding historical events related to the newspaper and its founder, Watanabe Kenzo.

〔復刻版より63%縮小〕

Main newspaper page layout featuring multiple columns of text, several photographs (e.g., group photos, portraits), and prominent headlines such as '本紙創刊十周年' and '愛善の大旗を掲げて'.

本紙創刊十周年

愛善の大旗を掲げて 覚醒を促す事茲に十年

今や多数鐵石の同志を獲得す 出口王仁三郎

光明世界運動の 第一線に飛躍する本紙

轉換期の人類史上に特筆すべき足跡 創刊十周年を迎へて

平和指導新聞として 世界第一位の榮冠

昭和九年春において既に 発行部数一百万部を突破

満洲シヤム南洋等 燦として輝く事蹟

本紙特派記者の大活躍

愛善の大波紋

全世界に及ぶ

社会と宗教との交錯を知る格好の資料

井上順孝 (國學院大学教授)

宗教団体が刊行する新聞の内容を読んでいくと、教団内の情報にとどまらず、当時の社会情勢や、思わぬ関係者の発言を知ることができたりする。今回復刻された『人類愛善新聞』は、大本の機関紙だが、そうした観点からもきわめて興味深い新聞である。大本は一九二二(大正一〇)年に弾圧(第一次大本事件)を受けたあとも、人類愛善会を結成して運動を続けた。『人類愛善新聞』は一九二五(大正一四)年の創刊であるが、当時の教団の様子のみならず、社会全体の雰囲気や側面から映し出している。大正末から昭和初期という時期は、戦前における日本社会の大きな転換期の一つである。その雰囲気や随所にうかがえ、きわめて重要な資料である。のち内閣総理大臣になった平沼騏一郎の寄稿があるが、将校たちからの寄稿も多数見受けられる。大本は軍人に影響が大きかったということが、ここからも読みとれる。

貴重なのは、戦前数多く存在したが、戦後はほとんど解散してしまった愛国主義的な団体の紹介があることだ。これらは名称さえ容易には知りえないものであるから、短い紹介であっても価値は高い。紹介の仕方から大本のスタンスが読みとれる。「愛善」とともに、「愛国」が重要なキーワードであったことが分かる。また、短いものだが、バハイ教、世界紅十字会など大本が提携していた団体に関する記述がある。あるいは、「王仁入蒙記」が連載された時期もある。出口王仁三郎は第一次大本事件後、一九二四(大正一三)年に合気道の創始者植芝盛平らとともにモンゴルに渡っているが、そのときの状況を描いたものである。

読んでいくだけでも面白い記事が数多くあるが、丹念にたどっていくと、この時代の雰囲気や伝わってくる。新宗教研究のみならず、近代の宗教研究者一般、さらには社会学、人類学といった分野の研究者にもきわめて有用な資料である。このような資料が復刻されたことは、研究者として大変有意義と感じる。是非多くの人に利用してもらいたい。

近代日本史の宗教思想的基盤を理解するために

島蘭 進 (東京大学大学院教授)

出口なおと出口王仁三郎によって創始された大本は、近代日本史と宗教の関わりを考える際、最大級の重要性をもつ宗教運動だ。出口王仁三郎は世直しの思想と皇道論とを二つながら身につけ、大きな抱擁力と鋭敏な理解力と多様な表現力をあわせもった型破りの指導者だ。

王仁三郎単独の指導体制になってから大正一〇年と昭和一〇年に二度の弾圧を受けた大本だが、その間の時期は急速に発展しつつ言説内容は大きく転換した。激変する世界情勢、国内情勢を反映して、変幻自在の王仁三郎が舵をとっていった結果だ。刻々と変化し展開していくこの運動の軌跡を印象深く示しているのが一九二五(大正一四)年に設立された人類愛善会の機関紙、『人類愛善新聞』だ。

出口なおは神の意志の表現として世界の「悪」を問い、それを世の「立替え立直し」のビジョンに結び付けた。出口王仁三郎はそれをさらに社会や国家のあり方をめぐる言説や、宗教を主体とする国際的な連携協力のビジョンへと展開させていく。「人類愛善新聞」の初期はこうした新たな方向性が具体化されていった時期だ。ここで展開されていく世界平和や宗教協力の思想には、現代世界の課題に直結するものがある。大本のそうした平和主義的、国際主義的展開をたどるのに『人類愛善新聞』はかっこうの資料だ。

だが、経済情勢や対外関係の悪化、また国内の反体制運動の高まりを受けて、国家による締め付けが押し進められ、大本の運動もそれを反映して次第に皇道論の方へと引き寄せられていく。困難な情勢の中で、大本が微妙な舵取りを迫られていく様相についても、『人類愛善新聞』から読み取れることは少なくない。

これまで、『人類愛善新聞』は参観しにくい資料だった。この『人類愛善新聞』が復刻刊行されることにより、(一)大本の宗教活動や出口王仁三郎の思想の理解、(二)この時代の社会や民心の動向の理解、ひいては、(三)近代日本社会の思想基盤の理解にとって、得られるものは小さくないだろう。

昭和初期の思想界を写す万華鏡

原 武史 (明治学院大学教授)

『人類愛善新聞』には、昭和初期の思想界を彩る人々が登場する。王仁三郎自身と親交のあった頭山滿や内田良平ばかりか、北一輝、西田税、大川周明といった国家主義者、「神ながらの道」の寛克彦、評論家の室伏高信や長谷川如是閑、「新しい女」の平塚らいてう、キリスト教社会主義者の賀川豊彦など、その顔触れは実に多彩である。

例えば平塚らいてうは、「大本運動の何たるかを理解するにつれて、神論や霊界物語を読ませて戴いてひた〜と胸に寄せるものある事を否定は出来ません」(一九三三年八月上旬号・第一九三号)と大いに共感する一方、長谷川如是閑は「お筆先ですか……それは問題の外でせう」「第一、そんなに書ける筈がないし、未発表の分もあるといふ点など、後から後からと誰か書いてゐるのぢやないでせうか」と一蹴する(同年九月上旬号・第一九六号)。

このように、いかなる声であろうがそのまま掲載するところが、普通の宗教団体が発行する新聞とは一味も二味も違っている。さながら、『人類愛善新聞』という万華鏡を通して、昭和初期の思想家の立ち位置が見事に浮かび上がってくるかのようだ。

本文のほかに、王仁三郎が熱心に広めようとしたエスプレント語の講習会の広告が掲げられていたり、独習講座の欄が設けられたりしているのもおもしろい。独習講座のレベルは高く、いま読んで驚嘆に値する。表向きは天皇や皇国のイデオロギーを掲げつつ、世界共通言語へのこだわりを貫く姿勢のなかに、大本という教団のもつ複雑な性格がよく現れているように思われる。

『人類愛善新聞』を推薦します

ナンシー・ストーカー (テキサス大学准教授)

大本による『人類愛善新聞』の刊行は、メディアを活用した宗教としては先駆者的存在であった。本紙の刊行意図・編集方針は他新宗教団と似ており、出口王仁三郎が設立した国際的人道団体である人類愛善会の機関紙として発刊され、政府の政策を批判し教団の主張を伝播する為の媒体となった。

本紙は、大本の地方支部や信徒を通じて、日本本土を超えて満蒙・台湾・旧外地・南洋・北米等までひろく配布された。本紙は、幅広い読者に訴える一般時事問題記事やコラム欄があり、百万部を超える部数を誇るまでになった。

本紙と比肩する類例として最も相応しう宗教新聞は、CHRISTIAN SCIENCE教会創設者・エディー夫人により一九〇八年に刊行されたChristian Science Monitor(以下CSM)である。CSMは教会資本で運営され、民間資本の影響を受けなく非営利団体であり、その深い国際情勢分析への評価により七つのピューリッツァー賞等を獲得した。当時のエディー夫人もまた、王仁三郎同様カリスマ的宗教指導者であり、彼女の霊的癒しを求め、多くの信者が集まり、巨大教団へと成長した。当時の大手メディアから大本は「異端」と評価されたように、CHRISTIAN SCIENCE教会は医療・薬学を拒絶する等、伝統的キリスト教の教義から逸脱した面があり、常に論争的であった。作家マーク・トウェインは著書『CHRISTIAN SCIENCE』(一九〇七年)にて、教団を資金集めが上手なエディー夫人個人を崇拜する邪教であると嘲笑した。多くの主要紙が大本を淫祠邪教であり、王仁三郎を煽動者と誹謗したように、アメリカのメディアもエディー夫人を誹謗したが、両教団の拡張勢力は衰えることがなかった。CSMはメディアからの批判に反論したが、刊行の使命は「誰も傷つけず、人類すべてを祝福すること」とエディー夫人は宣言した。王仁三郎も同様に、本紙を通してメディアによる偏見・誤解を覆す努力をした。

『人類愛善新聞』には国家主義的な主張も見られるが、世界平和の促進、国民国家を超えた人類愛が根底には流れている。大本は、国家による宗教弾圧や出版物への検閲、アジア諸国への帝国主義的風潮の強い時代において、正論を訴えた気概ある人道主義団体であり、結果として国内外に大本の運動への賛同者を数百万人へと増やしていった。それが大本の運動が日本近代史において、最も影響を与えた宗教運動の一つとして今も認識されている重要な理由である。(不二出版編集部翻訳)



